

な る ほ ど 経 済 指 標

鉱工業生産指数

検索

発表機関:経済産業省(速報値は毎月末頃発表)

わが国の経済動向を分析するうえで、製造業の生産活動をウォッチすることは重要です。というのも、生産の水準や方向をみることで、景気がどのような状況にあり、良くなっているのか、それとも悪くなっているのか、ということを手端的に把握できるためです。そこで今回は、こうした生産活動を数値で表す「鉱工業生産指数」について解説します。

1. 鉱工業生産指数とは

鉱工業生産指数とは、国内の鉱業・製造業における1か月間の生産量を、基準年の月平均生産量を100とする指数で換算したものです。わが国では国内総生産に占める鉱工業の割合が約2割を占め、その活動が他の業種に与える影響も大きいと、注目度の高い指標です。

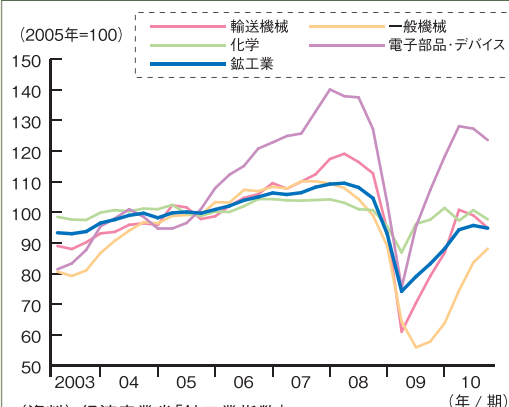
生産指数の特徴として、①景気に概ね一致した動きを辿る点や、②毎月の指数(速報値)が翌月末頃に発表されるなど、速報性が高い点が挙げられます。このほか、③鉱工業全体に加え、業種別の指数なども公表されています。そのため、企業が自社に関係する業種の指数の動きをみることで、景気の潮目の変化を素早く捉え、事業計画を策定する際の参考データとしても活用できると考えられます。

2. 鉱工業生産指数のこれまでの動き

ここで、最近の生産指数(季節調整値)の動きをみてみると(図表)、景気に対してほぼ平行な動きを示しています。すなわち、生産指数のピークは2008年1～3月期の109.5と、内閣府が「景気の山」と判定した2007年10～12月からは1四半期後ずれているものの、ボトムは2009年1～3月期の74.2と、「景気の谷」に一致しています。さらに、ピークからボトムまでは、わずか1年で3割を超す低下幅を記録しており、この間、企業が過去に例をみない規模で急速に減産を進めたことが、数字のうえでも確認できます。

もっとも、生産指数は底を打って以降、業種ごとのバラツキはあるものの、総じて持ち直しの動きが進んでいます。具体的にみると、電子部品・デバイスは、2007年前半頃の水準まで回復しているほか、輸送機械や一般機械、化学なども、ピーク対比で8～9割と、前回の景気回復局面の中期である2003年末～04年初に近い水準まで回復しています。

図表 業種別の鉱工業生産指数の推移(季節調整値)



(資料) 経済産業省「鉱工業指数」
(注) 2010年7～9月期は7月値。

3. 今後の注目ポイント

ただし、足元では、生産指数の持ち直しの動きにも鈍化の兆しが窺われます。今後は、政策効果の期限切れなどで国内需要の頭打ちが予想されるうえ、海外経済の減速も懸念されることから、生産指数は再び低下傾向を辿るリスクが高まっています。その点、2008年秋～09年初にみられたような大幅な落ち込みを回避できるかが、大きな注目ポイントになると言えましょう。

渡辺 洋介